私の四川省一人旅17
＜亜丁Ⅳ・亜丁、3年前の旅の思い出 ③＞

田井　元子

母たちの仲間と、中国四川省にある大姑娘山（5,025ｍ）に登った後一人残った私は、3年前に訪れた、四川省と雲南省の省境に近い、最後のシャングリラ・亜丁が忘れられず再びその地を訪れていた。（‘わんりぃ’5月号より続く）

登るにつれて高度が上がり、呼吸はいよいよ苦しくなってくるが、「美しい湖が見たい」という目的を得た私は張り切っていた。

苦しければ苦しいほどその向こうにあるものの価値は増していくのだ。これは盛り上がらずにはいられない。しかし私ほど好奇心が旺盛でない他のメンバー達は、思いがけず始まってしまった酸素の薄い高地での、苦しい登山に徐々に士気を下げているようだった。そんな時私達の登っている道を上から下ってきた中国人の旅行者らしい一組の男女とすれ違った。

「你好！　頂上まで、あとどれくらいですか？」
私達がたずねると2時間くらいとの答えだ。
「ええ～！！あと2時間！？」
疲労が限界に近づき始めていたやや年かさの一行は、この答えに思わず顔をこわばらせていた。元々登山をするなどという話は聞いておらず、ほんのハイキングのつもりで出かけてきたのだ。各自十分な食料や水なども持っていなかったところに、おりしもにわかに湧いてきた雲からは、時折パラッ、パラッと霧雨までパラつきはじめた。

ついに「私はこれ以上無理だからここで下山するわ」という声が上がり、「それなら私も・・・」と、とうとう私以外の女性メンバーは、そこで全員登山を続行するのを断念してしまった。

しかし事態がそうなると、何故だか私は余計に張り切ってしまうのだ。

「私は行くよ！！　絶対湖が見たいから一人でも行く！！」

気をつけて行きなさいよ～！！との声を後ろに、「大丈夫、大丈夫～！！」と手を振り一人で山道を登り始めると、いくらも行かないうちに少し先を歩いていたセミプロカメラマンのKさんが「こりゃ、だめだぁ～」と座り込んでいた。「カメラも水もカッパもあの坊主が持って行っちまったし、もう無理だよぉ～」

そういえばKさんの荷物は、殆ど全部ポーターを勤めるチベット少年が背負っていたのだ。本来ならポーターは雇い主と共に歩くのが鉄則なのだろうが、臨時で雇われた少年にはそんなことまで思いおよばなかったのだろう。歩みの遅い日本人勢に合わせているのが面倒になったらしく、とっとと先に行ってしまったらしい。

ここでKさんも登山を断念してしまったので、日本人参加者組は私だけになってしまった。幸い先ほどの雲はすぐにどこかに流れ去ってしまい、天気は再び快晴だ。登るにつれてぬかるんだ土の道はいつしか岩の上を歩くような道に変わりはじめていた。片側は大きな岩壁が切り立ち、反対側は足を踏み外せば即サヨウナラの深い谷だ。足元からはゴウゴウと激しく水の流れる音が響いてくる。ゾクゾクしてきた。こういう場所を歩くのは嫌いじゃないぞ～。

途中岩壁の斜面を昨夜の雨水が流れ落ち、小さな滝状となっている岩場で足場を探しながら登らなければならないようなところもあったが、岩登りは子供の頃から大得意だ。ちょっとスリリングな登山の道のり自体は十分楽しみながら登っていたが、それにしても呼吸が苦しくてたまらない。既に4000メートルをゆうに超える高度になっているはずだ。1メートル登っては呼吸を整え、２メートル登っては休みながらヨロヨロと登っていると突然頭上の岩から「ホゥッ！、ホウッ！」と叫び声が響いてきた。

見上げると十数メートル上の岩からチベット少年が笑顔で両手を振っている。「早くあがっておいでよ～！」と叫んでいるのが仕草でわかった。見晴らしの良いその場所でみんなが登ってくるのを待っていたらしい。「ヤッホ～！」手を振り返すと力を振り絞って彼のいる場所までできる限りのスピードで登った。

少年のいる岩まで登り着いた時には胸が張り裂けそうだった。心臓は早鐘のように打ち、しばらくは言葉を喋ることもできない。まるで1000メートル全力疾走した後のように、胸を押さえ犬のように口を開けたまま、いつまでもハァハァと荒い息を吐き続ける私に少年は困惑したような顔を向けていた。
「大丈夫？」
「だ、大丈夫だけど、ちょっと待ってぇ～」
一息つくと少年と一緒に歩き始めた。
悔しいなぁ～。全く下界の人間の身体は軟弱だ。私が胸を押さえヨロヨロしながら歩いているというのに、少年は5キロはあるだろうKさんのカメラ機材や荷物が詰まった大きなザックを背負ってタバコをふかし、鼻歌など歌いながらヒョイヒョイと弾むような足取りで岩を登っていくのだ。彼としては私を気遣いだいぶ歩く速度を落としているのだろうが、とても同じペースでは登れない。何度も足を止めて息をついた。

チベット人の身体ってかっこいいなぁ・・・。もしこの土地で1年暮らしたら、私も彼らのような身体になれるのだろうか。少年は数メートル進む度に振り返って私が追いついてくるのを待っていてくれた。苦しいけど楽しい登山

だった。

しばらく頑張って登っているうちにある程度山を登りきったらしく、なだらかな道になったので少年と肩を並べて歩いた。当時私の中国語は現在よりも拙く、彼とはあまり会話することもできなかったが、楽しい気分を共有する気持ちは通じ合っていて一緒に歩いているのが楽しかった。こんな下界から遥かに離れた場所で、昨日知り合ったばかりの異国の少年と二人きりで歩いているなんてなんだか不思議だ。

「湖は綺麗？」

私の問いに、少年は深く頷いた。

「到了～！！」

両手を広げて少年が叫んだ。

「え!?ここ!?　着いたの?着いたの!?　**やった～!!」**

目の前に聳えている岩山の氷河は手を伸ばせば届きそうだ。実際に岩山の斜面を少し登れば、この手で氷河に触ることもできそうに見えた。

「湖は！？」

数メートル進んだところで、少年の指差す方向を見た私は思わず息を呑んだ。それは私の想像を遥かに超えた、信じられないくらいに美しい美しい湖だったのだ。

「きーれーい！！！」

思わず日本語で叫んだ。

「綺麗！綺麗！綺麗～！！！」少年の肩をつかみ、激しく揺さぶりながら何回も叫んだ。

山の上にある美しい湖・・・、私が想像していたのは、いつかバイクで青森を走った時に見た十和田湖のような青い湖だった。シンとした静寂に包まれた深い藍の湖。なんとなくそんな風景を頭の中に浮かべて今まで歩いてきたのだが、目の前に現れたのは、キラキラと鮮やかな水色が複雑に重なり合い、まるで燐光を放っているかのように輝く宝石のような湖だったのだ。降り注ぐ太陽の光を浴びて水の表はさざ波をたてる度に色を変え、砕けたガラスのかけらが塗してあるかのように煌めいていた。

信じられない。こんな湖がこの世にあるなんて想像もしていなかった。

呆然と、ただ「綺麗～！！」という言葉を繰り返す私を見て、少年は満足そうにしていた。彼らにとっては当たり前の自分達の土地が、こんなにも美しいということが誇らしく嬉しいのだろう。

湖の畔に並んで腰掛け景色を眺めながら、少年は何度も「綺麗？」「気に入った？」と尋ね、私は何度も「最高に綺麗」と答えた。言葉の足りない二人には、これ以上ないと思える美しい風景の前でそれ以上話すことは何も無かった。

しばし想像を超えた美しい風景に陶然としていた私だったが、ふと我に返るとある事に気がついた。

これは先程の秘密の花園にも負けないくらいロマンティックな状況なのではないか。

昨日出会って以来大好きになっていた利発でかわいい13歳のチベット少年と私の他には誰もいないこの美しい美しい風景の中で、並んで腰掛けている今の状況だって花園の二人に負けないくらい映画の中の一コマの様じゃないか～。

ただ、ヒロインとなるべく女優の私が少女というより少年の母親役を務めたほうが似合いの年増であることと、身にまとっているのが可愛らしいチベット服ではなく薄汚れた登山服であるということが、その場を著しくロマンティックからかけ離れたものにしていた。私の人生史上これ以上は無いという最高のロケーションに恵まれながら、なんと無念な事だろう。

あぁ！！５分でいいから私もチベットの少女になりた～い！！

美しい風景に深く感動しながらも、ひそかに場違いな望みをチラッと胸に浮かべていた私なのだった。（続く）

チベットの少年と訪れた宝石の湖